

第5章 総括

第1節 縄文時代および弥生時代の林ノ脇遺跡

本調査で検出した縄文時代の遺構は溝状土坑が5基である。これについては、2019年度調査（青森県教育委員会2021a）および第634集調査（青森県教育委員会2023）で検出したものと、相互に関連し合っていることから後述する。

遺物は、弥生土器が平安時代の第22号竪穴建物跡堆積土から2点、遺構外から3点出土した。いずれも細片で中期以降に比定される。石器類は石鏃、剥片、スリ石、凹石が第18号溝跡堆積土から出土している。すべて流入したもので帰属時期も特定できない。同様に台石も4点出土しているが、縄文時代のものか平安時代のものか断定できない。

前回調査分に比べ、遺構遺物ともに極端に少なく、縄文時代の積極的な活動が三保川縁辺から50m以内の範囲に限られることがわかった。ただし狩猟に関わる営みだけが、縄文時代のおそらく中期以降も散漫ではあるが継続されていることが判明した。今回、弥生時代に比定される遺構は全くなく、前回調査で検出した遺構もごく局所的な営みであったことがわかった。

第2節 溝状土坑

今回本事業で検出した溝状土坑5基と前回の調査で検出された42基、および隣接する第634集調査区で検出した4基を合わせた51基をもとに記述する。

前回調査の報告書でも述べられているように、落とし穴とされる本遺構については調査の増加により検出数も相当数増えており、これまでにその形態や配置、構築時期などについて多数論じられている。各発掘調査報告書でも細かく分類分析されており、八戸市岩ノ沢平遺跡などの大型な特異例を含めても、長軸と短軸や深さなどの数値の差異から、その機能用途が大きく変わることはない。また、調査時点で、後世の削平などの影響を考慮することなく、規模の大小（長短）などの数値の近似値を規格性があるものとして捉え、同時存在と見なすことは短絡的であり、さらに断面形状にみられるオーバーハングなどが構築者の意図した挟り込みなのか崩落したものなのかの判断も明確ではないままに、その類似性だけをもって、それらを同時期性として捉えることは危ういと考える。機能においても単一的機能と複数の機能、一方なのか双方が同時に機能したものなのかの検証も難しい。しかし機能については、概ね後者に優位性が高く、対象獣もシカに特化した可能性があるとして認識されているのが本遺構に対する現状ではなかろうか。

本県の溝状土坑については、上記の事項および研究史を含め、福田友之が県全域の検出事例を集成検討し論じている（福田2018）ほか、永嶋豊も当該地域の発掘調査例を基に論じている（青森県教育委員会2002・2003）。その中で、類例の増加による蓄積された分析も現状では実像に迫るまでには及ばない点も強調している。正に想像と推定によるところが大きいものの、我々が近寄れる要因の一つに、構築者の意図が強く反映されたと思われる、掘り込み位置と主軸（長軸）方向や各々の距離間（距離感覚）から得られるいわゆる配置であろう。想定される配置も、複数基の同時期機能を仮定するにとどまるが、凡そ地形と各遺構の間隔や傾きなどから考慮されたものとなる。

配置については、前回の報文でもいくつか記述されており、三保川に近接して密な一群とその北側に散在する一群に分けた中から、複数の列を抽出している。今年度の検出数を加えて再度配置をみると捉え方も次のように多様となる。その内の一つにSV36－SV22－SV09で構成される東西方向の列も、今回の検出遺構を加えてみると、SV36を起点にSV36－SV51－SV49の南北列で捉えることもできる。他に等間隔の東西列としては、SV44－SV48－SV49の並びもあり、SV43の北側にも遺構を想定すれば、SV45－SV43の列もあり得るだろう。また、密な一群のなかで主軸方向が異なるSV39とSV17－SV18－SV19を区分している点で、SV17～19を単位としてみた場合、SV38－SV03－SV02、SV08－SV07－SV11など3基一単位としての構築も想定される。総数664基が調査された発茶沢遺跡の報文（県埋文報第120集）にも、「10数基が並ぶ列でも基本的に2列一単位の集合体と考えられるものがある」と述べられており、当該遺構の用い方に多様性があることも窺える。このように傾きを基にしてみると、SV46－SV50の主軸（長軸）方向は明らかに異なり概ね東西方向に主軸をとるものであり、このような場合、南北方向に主軸をとる他の溝状土坑とは、構築時期ないしは構築者の違いを想定してしまう。

いうまでもなく溝状土坑の特徴は、長狭な穴というその形状にある。おそらく獣道に沿って構築されたであろう罠であれば、構築者はその道筋を念頭に配置したものと推測され、主軸（長軸）の向きは狩猟における獲物獲得の確率を高める重要な要素であったと思われる。

本事業に関わる発掘調査により、横浜町管内での溝状土坑の検出例も増加しており、それらと周辺地域での検出数を表2に示した。これらから、主軸（長軸）方向だけを注視し大きく東西軸と南北軸に分けてみると、以下のような傾向がみられる。

林ノ脇遺跡の各溝状土坑の主軸方向は、密な一群も散在する一群も概ね真北から僅かに東側に傾く、南北方向を主軸としたものが大多数であり、他に横浜町管内で検出された3遺跡、29基の主軸方向もすべて南北方向である。

六ヶ所村管内の15遺跡・34地点のうち27地点、約7割が東西方向である。600基以上を検出した発茶沢遺跡では、どちらの方向とも捉えられる中間的なものを南北方向に含めても、8割以上が東西方向である。

調査遺跡数が少ない、むつ市管内地域は東西方向軸となるものが多く、東通村管内遺跡は南北方向軸が優位である。

本事業関連で多数の遺跡が調査された、野辺地町管内18遺跡・20地点をみると、東西方向8地点、南北方向11地点と南北方向優位であるものの大きな差はなく、横浜町管内寄りの北部側に位置する、向田（38）～（40）遺跡では大多数が南北方向である。

大まかにみると横浜町管内遺跡の溝状土坑は、周囲の河川に面して直交するように南北方向を主軸として構築されているのに対し、六ヶ所村の吹越烏帽子南麓から南側の湖沼群周辺のもの、湖岸から平行するような配置で東西方向を主軸として構築されるものが多い。このような主軸方向の二分した特徴は、地勢的要因も大きく影響しているものと思われ、その一つが横浜町の東側に位置する金津山、八郎烏帽子、吹越烏帽子で形成された分水嶺で、そこを源とした多数の小河川が構築の際に規範性をもたらす要因となっているものと推測する。

本遺跡より北部地域の溝状土坑の検出例は少ないが、下北丘陵を境に違いが見られる。東通村前坂

下(13)遺跡は29基中24基が南北方向で、21基が小老部川に直交したかたちで構築されており、小河川に面した状態は、横浜町管内遺跡の位置的なあり方と共通する。陸奥湾側むつ市内田(2)遺跡は45基中18基が東西方向、南北方向は12基、中間的なのが15基と混在しているが、三者はほぼ等高線に沿うように構築されている。同遺跡は、田名部平野に位置し河川から距離を置くものの、周辺に溜め池や湧水をもたらす小谷地があり、それを目安に構築されているものと推測される。

概ね、東西方向軸と南北方向軸に大別されるなかで、さらに細かな傾きまで目を配ると、百目木(3)遺跡では真北から西側へ傾くものが多く、本遺跡と吹越(2)遺跡では真北から東側へ傾くものが多い。この違いが何に由来するものか検証は難しいが、獣道のあり方とか、構築時期(年代)および構築者(集団)の違いによるものとして区分せざるを得ない。

旧石器時代の落とし穴は本県では未だ検出されていないが、縄文時代早期以降、円形・楕円形から溝状にその形態を大きく変えながらもその機能は大きく変わらず、人が構築する住居跡など他の遺構と遜色はなく、人の食を支えるより重要な役割を担ったものであろう。構築者(集団)の居住域と

の関係もさることながら、その形態変化の時期や、発茶沢遺跡のような大規模な狩猟場が複数の集団の手によるものか、モダシ平遺跡のような広範囲に単一のものの意味や、数十基以上～100基を超える検出数の割に重複が少ない理由や、構築時期と機能期間やメンテナンス等、着目すべき課題は多い。

私的な事ではあるが、溝状土坑については他の遺構と比べ「出土遺物は(ほとんど)ないし単調な土層で掘り下げだけに労力を要する機能も明らかな遺構」という意識が先行してしまい、ともすれば発掘がなおざりに成りがちだったように思われる、上記の課題を詳細に把握するためには、安易に掘り下げることなく、遺構周辺および堆積土に対してより注意を払い調査する必要がある。(小田川)

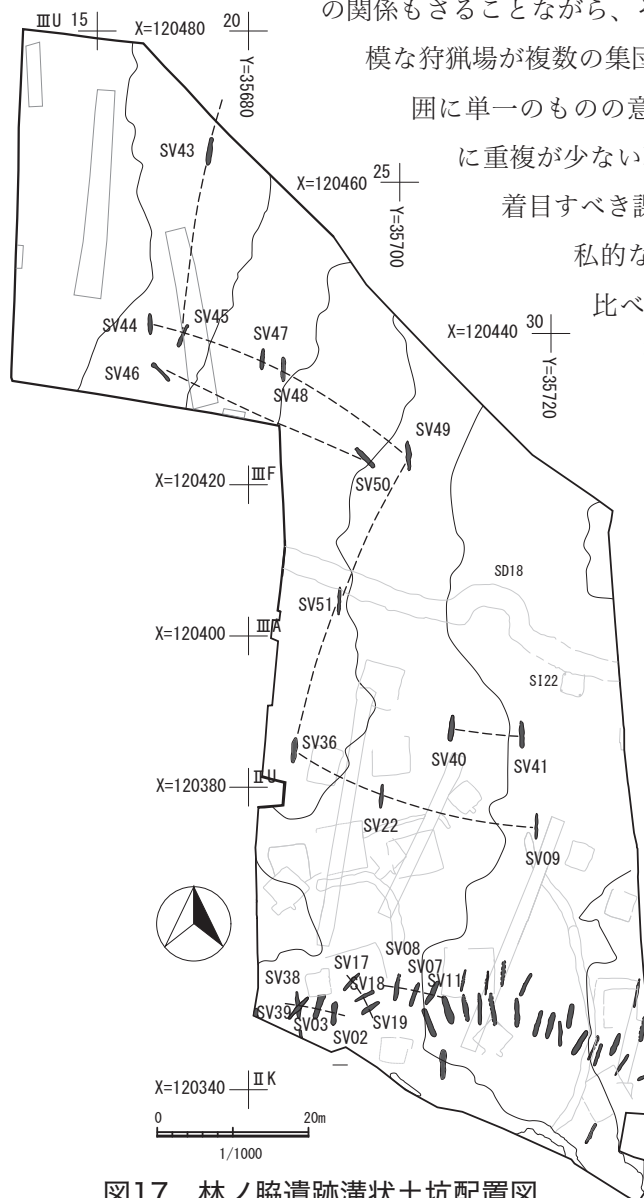


図17 林ノ脇遺跡溝状土坑配置図

林ノ脇遺跡Ⅱ

町村管内	遺跡名 (報告書名)	溝状土坑		主軸(長軸)方向		報告書番号	備 考	東西	南北	同率	地点数			
		区	検出数	東西	南北	県埋文報 / 野辺地文報								
横浜町管内	林ノ脇遺跡		51	5	46	県埋文報第620・633・634集	三保川北岸		1			遺跡数 4		
	モダン平遺跡		1		1	県埋文報第271集	北に荒内川		2			東西軸優位 0		
	百目木(3)遺跡		18		18	県埋文報第622集	牛ヶ沢川南岸		3			南北軸優位 4		
	吹越(2)遺跡		10		10	県埋文報第628集	吹越川南岸		4		4			
むつ市管内	内田(2)遺跡		30	13	8+(9)	県埋文報第602集		1			1	遺跡数 2		
	内田(2)遺跡Ⅱ		15	5	4+(6)	県埋文報第619集						東西軸優位 2		
旧川内町	熊ヶ平遺跡		2	2		県埋文報第180集		2			2			
東通村管内	前坂下(13)遺跡		29	5	24	県埋文報第75集	小老部川南岸、密に構築		1		1			
六ヶ所村管内	表館遺跡		15	11	4	県埋文報第61集	1区～4区までまとめた総数	1				1	遺跡数15の内34地点	
	表館遺跡Ⅱ		3	2	1	県埋文報第91集		2					東西軸優位24	
	表館(1)遺跡		2	1	1	県埋文報第121集	試掘調査報告書						南北軸優位 7	
	表館(1)遺跡Ⅳ		1		(1)	県埋文報第126集			1					
	表館(1)遺跡Ⅴ		2	2		県埋文報第127集		3					中間的 3	
	新納屋遺跡		1		1	県埋文報第62集			2		2		(中間含南北軸10)	
	鷹架遺跡		3	2	1	県埋文報第63集		4			3		※東西軸優位	
	発茶沢遺跡	A・B	393	336	15+(42)	県埋文報第67集		5				4		
		C区	38	23	9+(16)			6						
	発茶沢遺跡		9	6	1+(2)	県埋文報第96集		7						
	発茶沢(1)遺跡		36	32	1+(3)	県埋文報第116集		8						
	発茶沢(1)遺跡Ⅳ	A区	11	11		県埋文報第120集		9				5		
		B区	177	83	7+(27)			10						
	発茶沢(1)遺跡		1	1		県埋文報第126集		11						
	大石平遺跡		3	2	1	県埋文報第90集		12						
	大石平遺跡Ⅱ	Ⅳ区	1	1		県埋文報第97集		13				5		
		Ⅴ区	11	5	6				3					
		Ⅵ区	4		3+(1)				4					
	大石平遺跡Ⅲ		1	1		県埋文報第103集		14						
	沖附(2)遺跡		4	2	2	県埋文報第101集				2	6			
	富ノ沢(3)遺跡		1	1		県埋文報第147集		15			7			
	家ノ前遺跡・幸畑(7)遺跡Ⅱ	家ノ前	4	4		県埋文報第148集		16			8			
		幸畑(7)	4	3	1			17			9			
	家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ	家ノ前	4	3	1	県埋文報第160集		18			8			
		鷹架	7	1	3		図4基のみ、配置図も無し		5		3			
	幸畑(10)・(6)・(3)遺跡	(6)	4	2	2	県埋文報第222集				3	10			
		(3)	1		1				6		11			
	幸畑(7)遺跡		12	9	1+(1)	県埋文報第125集		19			9			
	幸畑(4)・(1)遺跡	(4)	4	4		県埋文報第236集		20			12			
		(Ⅰ)A区	2	2				21			13			
		(Ⅰ)B区	58	56	1+(1)			22						
	新納屋(1)遺跡		57	57		県埋文報第256集		23			2			
	弥栄平(1)遺跡Ⅲ		21	10	2+(9)	県埋文報第559集		24			14			
	千歳遺跡(13)		10	2	8	県埋文報第27集			7		15			
野辺地町管内	野辺地蟹田(10)、向田(30)・(31)遺跡	(10)	18		8+(10)	県埋文報第319集			1		1	2	遺跡数18の内20地点	
		(30)	6	1	3+(2)				2		2		東西軸優位 8	
	野辺地蟹田(10)遺跡Ⅱ	(10)	2	2				1			1		南北軸優位11	
	野辺地蟹田(12)遺跡	(12)	1		1	県埋文報第343集			3		3			
	向田(34)遺跡	(34)	2	2				2			4		中間的 1 遺跡	
	向田(35)遺跡		8	1	7	県埋文報第373集	6基が密集		4		5		(中間含南北軸12)	
	向田(37)遺跡		1	1		県埋文報第408集		3			6		※南北軸優位	
	有戸島井平(7)遺跡		1	1		県埋文報第348集		4			7			
	大谷地東沢(3)遺跡		1		1	野辺地文報第6集			5		8			
	向田(24)遺跡		4	3	1	野辺地文報第7集		5			9			
	有戸島井平(5)遺跡		2	1	1					1	10			
	向田(33)遺跡		5	3	2	野辺地文報第8集		6			11			
	向田(29)遺跡		3	1	2	野辺地文報第10集			6		12			
	向田(24)遺跡Ⅱ		6	4	2	野辺地文報第11集		7			9			
	向田(26)遺跡		1		1	野辺地文報第13集			7		13			
	向田(32)遺跡		1		1				8		14			
	二十平(1)遺跡		8	7	1	野辺地文報第15集		8			15			
	向田(38)遺跡		15	4	11	野辺地文報第16集			9		16			
	向田(39)遺跡		16	5	11				10		17			
	向田(40)遺跡		68	19	49				11		18			

※林ノ脇遺跡総数は、2019年調査の青森県埋蔵文化財調査報告書第620集と今回の第633集・第634集の合計。
 ※県埋文報第1・3・9・10・24・28・48集『むつ小川原開発予定地埋蔵文化財分布・試掘調査概報』は除外している。
 ※野辺地文報は、野辺地町教育委員会調査、野辺地町文化財調査報告書の略。
 ※主軸南北方向の()内数字は、振り分けが難しい中間的のもの、真北から傾き45°を前提とするが、各遺跡の配置図内全体からの見た目を重視し、40°以下を南北軸に、40°以上52°までを()表記、53°以上を東西軸としてみた。そして、中間的のものは南北軸に加算した。

表2 横浜町内・近隣市町村検出溝状土坑数と主軸方向

第3節 平安時代の出土遺物

土師器

第22号竪穴建物跡・第18号溝跡・遺構外から甕・小型土器(ミニチュア)が出土した。甕は頸部が短く、口縁部が「く」の字状に外反するものと、直線的に立ち上がるものがある。底部は外に張り出すものが多い。器面の摩耗が激しいが、外面は縦～斜位方向のケズリもしくはナデ、内面は横～斜位方向のナデである。胎土中に3mm程度の小礫を含み、焼成は軟質である。小型土器は、胎土の粒子が細かく、小礫を含まない。焼成はやや軟質である。第18号溝跡からは焼成前の貫通孔があるものが出土し、甕の可能性はある。坏は出土しなかった。甕の器形や調整等から、第7期(10世紀後葉)の年代が考えられる(宇部・大野・加藤2014)。2019年度調査で出土した土師器も、ほぼ同様である。

擦文(系)土器

第18号溝跡から1点出土した。端部が受け口状に内湾する口唇部付近で、外面に沈線が2条巡る。胎土は粒子が細かく、小礫を含まない。焼成はやや硬質である。口縁部片のため、胴部等の詳細は不明である。2019年度調査では第21号竪穴建物跡から北奥V類(齋藤2016)のものが出土した。これは10世紀後半～11世紀前半の年代が考えられている。

須恵器

遺構外から1点出土した。五所川原須恵器窯跡群の前期2期(10世紀第1～第2四半期)以降と考えられる(五所川原市教育委員会2003)。2019年度調査では第11号竪穴建物跡から前田野目群と推察される長頸壺の底部が出土した。こちらも前期2期以降の年代が考えられる。

製塩土器

第18号溝跡・遺構外から出土した。口縁部や胴部の傾きから、直線的に外反するバケツ状の器形を呈するものと推定される。外面は輪積痕が明瞭で、内面はナデが丁寧に施されている。胎土は土師器甕に比して粗い。器面・断面ともに二次被熱によって赤褐色をしており、脆い。

土製支脚

第18号溝跡・遺構外から出土した。体部は多角柱状で、支・脚部はほぼ円形である。今回の調査では円柱状のものは出土しなかった。10世紀後半～11世紀後葉の土製支脚は柱状支脚が主体で、円筒状→円柱状→角柱状へ変遷すると考えられており(青森県教育委員会2005a)、2019年度調査の第3号竪穴建物跡(上)出土の円柱状のものは、古い形態である可能性がある。

鉄生産関連遺物

鉄製品・羽口・鉄滓が出土した。鉄製品は刀子の茎や紡錘車の軸の可能性のあるもの、用途不明の円盤状のものが出土した。鉄滓は椀形鍛冶滓・鍛冶滓が出土した。2019年度調査では鍛冶炉を検出している。また、炉内滓・流動滓が出土しており、遺跡内に製錬(製鉄)炉が存在する可能性がある。

第4節 平安時代の集落変遷

今回の調査では1棟の竪穴建物跡を確認した。2019年度調査と合わると23棟を検出したことになる。2019年度調査では、重複関係から竪穴建物跡は小型のものから中～大型に変遷したとしたが、改めて竪穴建物跡の主軸方向とカマドの軸方向から検討する。主軸方向はカマドのある壁面に垂直な軸とした(北東北古代集落遺跡研究会2014)。主軸軸方向では、大きく3類に分類できる(図18-1)。即ち、ほぼ南向き(A類)・ほぼ南東方向(B類)・ほぼ東向き(C類)である。各類は更に2～4種に細分できる。また、カマド軸方向は4類に分類できた(図18-2)。なお、面積は単純に(長軸×短軸)で算出し、25㎡未満を小型、それ以上を中～大型とした。第22号竪穴建物跡は東壁で主軸方向を算出したが、東壁そのものが不整であるため、南壁の様相からC1としておく。

各類はほぼ小型と中～大型のセットとなっている。竪穴建物跡は、竪穴規模が異なるものが一定の比率で存在することが示されており(宇部2007等)、今回もそれを裏付ける結果となった。特に第15・21号竪穴建物跡、第2・7号竪穴建物跡、第9・11号竪穴建物跡は親和性が高い。なお、B2類は小型の竪穴建物跡のみで構成され、張出し部と長い煙道を有するもので、それが約10m間隔で並ぶ特徴があり、これは他の類型にない特異なものである。竪穴建物跡の重複から、A2→A1、A2→B2、A1→B1、B2→A3の変遷が考えられる。また、遺物の遺構間接合の関係から(表4)、A2→A1→B1→C3→B2→A3→C1→C2と推定される。溝跡のうち、第5号溝はA1類、第4・10号溝はB1類、第1・2・3・7・9号溝はA3類、第13・14・15・16号溝はC1類、第6・17・18号溝はC2類と軸方向が近いため、各時期の竪穴建物跡に付属する区画施設と思われる。第1号竪穴建物跡と第3・7号溝跡で囲まれた空間には、掘立柱建物跡等の施設が付属していた可能性がある。なお、第1・8号竪穴建物跡は柱穴、第3(下)・21号竪穴建物跡は周溝の配置から拡張の可能性が、また、第2号竪穴建物跡はカマド袖掘り方、13号竪穴建物跡はカマド火床面の検出高、18号竪穴建物跡はカマド(火床面)が2基検出されたことから建替の可能性があり、各類型内での竪穴建物跡間に時間差があった可能性は高い。いずれにせよ、竪穴建物跡は遺跡の南端から次第に北に向かって展開していくものと思われ、第18号溝跡と5・14・21号竪穴建物跡が最終段階と考えられる。また、その時点で集落内には埋没途中の窪地が点在し、窪地内に焼土遺構や鍛冶炉を構築したものと思われる。

堆積土中に十和田a火山灰・白頭山ー苦小牧火山灰は混入しない、もしくはブロック状に混入することから、竪穴建物跡の構築は白頭山ー苦小牧火山灰降下後と考えられる。白頭山の噴火は946年と考えられる(箱崎2021)ことから、10世紀後半の年代が推測される。竪穴建物跡出土の炭化物を炭素年代測定したところ、暦年較正年代(2σ)で第1号竪穴建物跡が10世紀末～中葉・10世紀後葉～12世紀前葉・12世紀中葉、第3号竪穴建物跡(下)が11世紀中葉～12世紀中葉、第15号竪穴建物跡が8世紀後葉～9世紀末・10世紀前葉～中葉、第17号竪穴建物跡(下)が9世紀末～10世紀前葉・10世紀中葉～11世紀前葉、第18号竪穴建物跡が8世紀後葉～9世紀末・10世紀前葉～中葉の年代が得られた(青森県教育委員会2021a)。第3号竪穴建物跡(下)は新しい年代であるものの、それ以外は出土遺物・火山灰の年代とほぼ整合しており、集落の年代は10世紀後半と推測する。

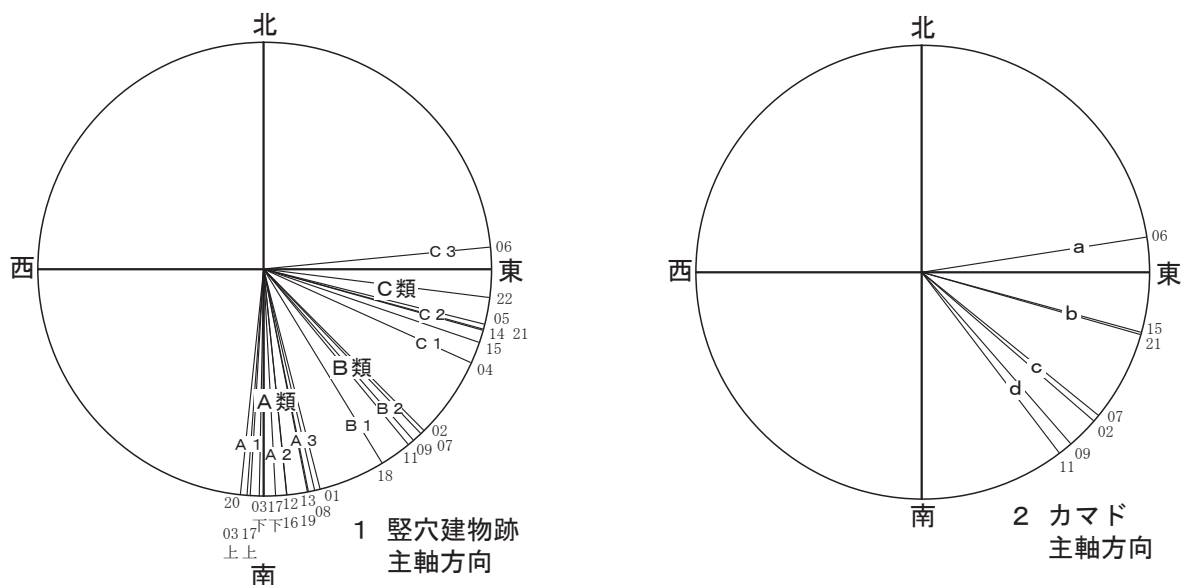


図18 竪穴建物跡の主軸方向およびカマド軸方向

表3 竪穴建物跡一覧

遺構名	規模 (cm)	床面積 (㎡)	規格	主軸		カマド軸		重複関係	炭素年代測定
				方向	分類	方向	分類		較正年代 calAD (2σ 暦年代範囲)
SI01	711×560×7	39.8	中～大型	S-14.4° -E Pit07 と Pit25 間	A 3				993calAD - 1050calAD (67.5%) 1085calAD - 1125calAD (22.6%) 1136calAD - 1150calAD (5.3%)
SI02	471×374×47	17.6	小型	S-44.8° -E	B 2	S-49.2° -E	c		
SI03(上)	690×651×31	44.9	中～大型	S-3.4° -W	A 1				
SI03(下)	591×494×11	29.2	中～大型	S-1.1° -W	A 1				1037calAD - 1161calAD (95.4%)
SI04	349×302×16	10.5	小型	S-65.7° -E (東壁)	C 1				
SI05	(358×333×-)	11.9	小型	S-76.0° -E	C 2				
SI06	342×323×45	11.0	小型	N-84.5° -E	C 3	N-81.1° -E	a		
SI07	363×348×53	12.6	小型	S-43.7° -E	B 2	S-51.0° -E	c		
SI08	656×554×19	36.3	中～大型	S-13.0° -E	A 3			SI08 > SI09	
SI09	487×338×14	16.5	小型	S-41.2° -E	B 2	S-41.0° -E	d	SI09 < SI08	
SI11	557×447×54	24.9	小型	S-39.5° -E	B 2	S-37.3° -E	d	SI11 > SI12	
SI12	(514)×(503)×17	25.9	中～大型	S-5.9° -E (北壁)	A 2			SI12 < SI11	
SI13	622×624×30	38.8	中～大型	S-11.1° -E	A 3				
SI14	491×407×14	20.0	小型	S-74.4° -E (東壁)	C 2				
SI15	353×347×15	12.2	小型	S-71.2° -E	C 1	S-74.7° -E	b		773calAD - 899calAD (86.3%) 923calAD - 947calAD (9.1%)
SI16	503×481×15	24.2	小型	S-5.8° -E (南壁)	A 2				
SI17 (上)	728×585×41	42.6	中～大型	S-4.2° -W	A 1				
SI17 (下)	512×448×7	22.9	小型	S-3.0° -E (北壁)	A 2				898calAD - 925calAD (20.5%) 944calAD - 1018calAD (74.9%)
SI18	576×558×29	32.1	中～大型	S-31.4° -E	B 1			SI18 > SI20	773calAD - 899calAD (84.9%) 923calAD - 948calAD (10.5%)
SI19	(311)×(106)×21	(3.3)	小型	S-11.4° -E (西壁)	A 3				
SI20	377×(348)×12	13.1	小型	S-5.9° -W (南壁)	A 1			SI20 < SI18	
SI21	580×545×25	31.6	中～大型	S-74.7° -E	C 2	S-74.1° -E	b		
SI22	296×(280)×17	(8.3)	小型	S-82.8° -E (東壁)	C 1				

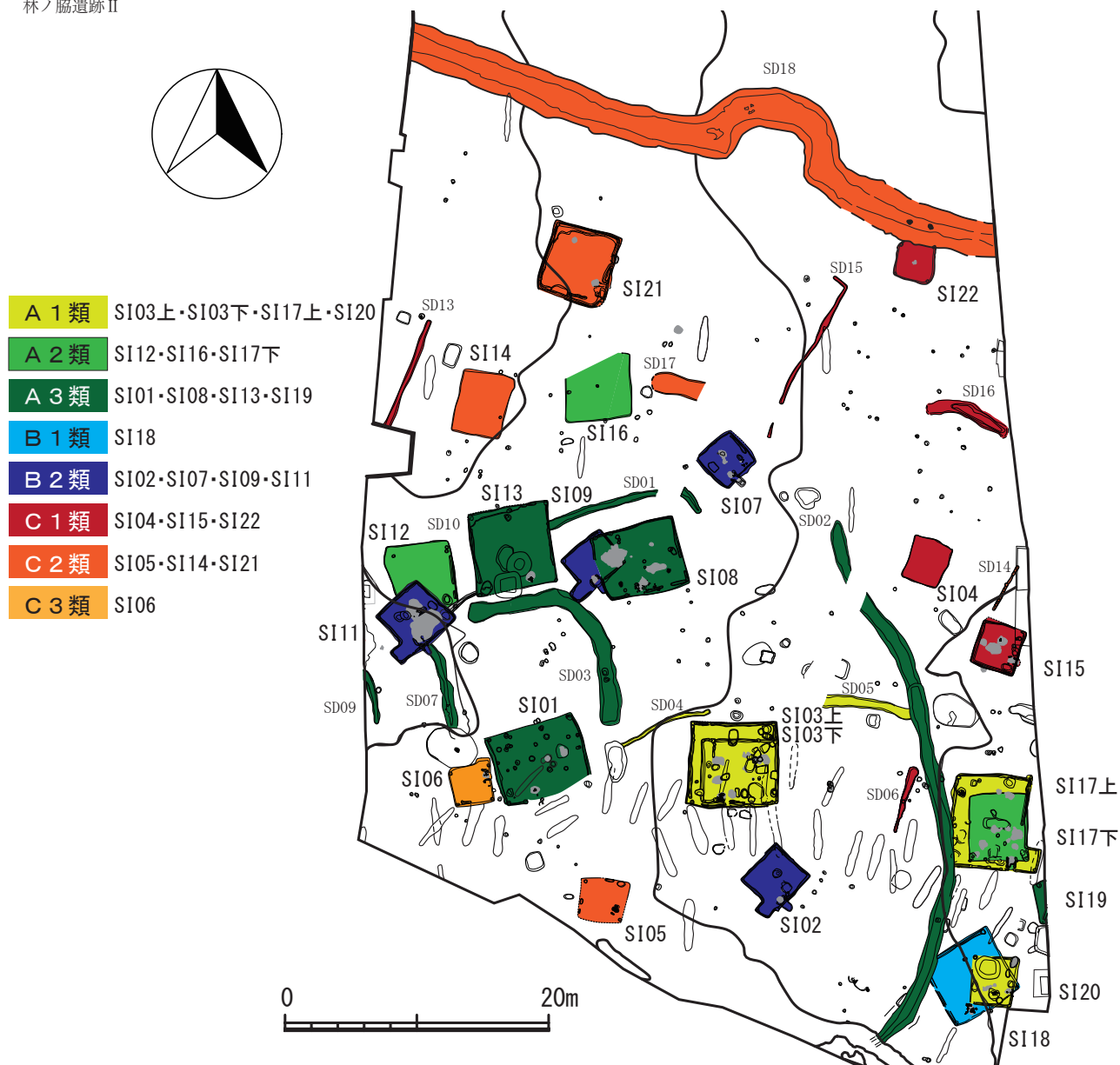


図19 主軸方向による竪穴建物跡および溝跡の分類

表4 遺構間接合遺物一覧

図番号	遺構	層位
図46-12-2	SI01	カマド1層
弥生土器	SI07	堆積土
	遺構外	Ⅱ～Ⅲ層
図52-1-1	SI02	堆積土・カマド堆積土・貼床内
	SI11	床直(P-31)
図66-6	SI06	床直
支脚	SD03	堆積土
図73-8	SI08	カマド堆積土
図74-1	SI18	カマド1堆積土
	SI08	カマド堆積土
図74-2	SI17(上)	堆積土
	SI08	カマド堆積土
	SN23	周辺堆積土
図74-6	SI13	カマド堆積土(P-6)
	SI08	貼床・堆積土
図74-7 鉄滓	SI09	カマド堆積土・貼床
	SI18	堆積土
	SI09	堆積土

図番号	遺構	層位
図79-1-1	SI11	堆積土・カマド堆積土(P-14・16・20)・SK01堆積土(P-6)
	SI06	堆積土1・2層
	SK24	堆積土
	SI11	床直(P-2)・SK05堆積土
図79-7	SI06	堆積土
	SI11	堆積土・カマド堆積土・貼床中・SN01堆積土
図80-2	SI06	堆積土
	SI13	確認面・カマド堆積土(P-4・5)
図83-1	SI03(上)	堆積土
	SD03	堆積土
図83-11 支脚	SI13	カマド上堆積土
	SD03	堆積土
図96-4	SI17(上)	SK01堆積土
	SD02	堆積土
図96-7	SI17(上)	堆積土・床面・床直
	SI17(下)	堆積土

図番号	遺構	層位
図96-10	SI17(上)	堆積土
	SD02	堆積土
図98-1	SI17(上)	床直・SK08・09堆積土
	SI17(下)	SN08火床面直上・床直
図103-1	SI18	堆積土・カマド1堆積土
	SI08	カマド堆積土
図103-4	SI18	カマド2堆積土・SK06底面
	SI09	カマド堆積土
	SK39	堆積土
図104-5	SI18	堆積土下部
	SK39	堆積土
図105-5	SI18	カマド1堆積土
	SI08	カマド堆積土
図124-16	SI13	確認面
	SK27	堆積土
図132-1	SI17(上)	床面・SK04堆積土
	SD02	堆積土
図134-11	SI13	堆積土
	SD10	堆積土
図133-5	SD03	堆積土
	SI03(上)	カマド堆積

第5節 屈曲を有する溝跡

今回の調査で検出した第18号溝跡は、調査区を東西に横断するように延び、中央付近で北側に張り出すように屈曲するのが特徴である。屈曲部の規模は長さ12m・奥行6m程で、溝の南側には幅6m・奥行3m程の空間が生じている。溝跡本体の軸方向はほぼ東北東(S-71°-E)である。堆積土はローム粒や炭化物粒を混合し、壁面・底面付近では混合するロームの粒径が大きく塊状であることから、壁の崩落土層と推測する。それ以外の層は人為堆積(埋戻)土と考えられる。土層A-A'の10層は掘方埋土である。堆積土中に火山灰は認められない。また、ロームが集中する等、土塁構築土の崩落と思われる堆積もなかった。土層観察では、溝跡の重複は認められなかった。遺物は堆積土中から散漫に出土するが、土器、土製品類と鉄製品類は特に屈曲部西側から多く出土した。また、円礫および扁平礫が約420個、堆積土中位から下位にかけて全体的に出土した。礫の約12%に被熱が認められた。機能時期は白頭山-苦小牧火山灰降下以降と考えられ、また、出土土師器や遺構の形状・周辺遺構の配置状況等から、平安時代、10世紀後葉のものと思われる。前節の検討から、第5・14・21号竪穴建物跡と共伴する、集落の最終段階の遺構と考えられる。堆積土中の炭化物の炭素年代測定からは(第4章第1節参照)、11世紀中頃~13世紀前半・13世紀後半~14世紀後半の年代の分析結果が得られたことから、本溝跡は平安時代以降も埋まりきらずに開口しており、鎌倉時代以降に礫や遺物が混入した土で埋戻しされたと推測される。なお、土層A-A'の3層は緻密で硬化しており、通路痕跡の可能性もある。また、屈曲部西側の堆積土中で確認された焼土は、埋没(埋戻)過程の凹地で形成した可能性もあることから、埋戻しは複数回にわたって行われた可能性が高い。

本溝跡の北側で竪穴建物跡は検出されなかったことから、集落を区画する「壕」としての性格を持ち、屈曲の張り出しは集落の外側を意識していることが窺われる。屈曲部やその周辺からは、柱穴等の遺構や、溝跡の付属施設と思われるものも検出できなかった。土層観察からは、溝の掘り直しはなく、また、土塁も伴わなかったと考えられる。なお、昭和23年(1948)撮影の米軍の空中写真からは、遺跡内で壕と思われる痕跡が確認された(図20)。遺構配置図と合成したところ、調査区にあたる部分では第18号溝跡とほぼ一致した。痕跡の規模は東西180m・南北80m程と推測される。このことから、本遺跡はいわゆる「防御性集落」であると考えられ、「津軽I類」(三浦1995)に該当するものと思われる。なお、空中写真では、屈曲部脇に壕の痕跡を横断する道路が見える。道路は屈曲部の東脇から屈曲部内側に続き、その前後ではほぼ直角に曲がり、クランク状を呈している。この通路は現地割にも合致しており、集落の出入口の痕跡を反映している可能性がある。溝跡は現地割りとは一致していないが、調査区内では溝跡の2~3m南に溝跡とほぼ平行して地割りがされており、溝跡の痕跡を踏襲していることが窺われる。

第18号溝跡と同様の屈曲を有する壕・溝跡は、東北町赤平(3)遺跡(第2号壕・青森県教育委員会2007)・八戸市沢里山遺跡(溝跡・八戸市教育委員会1996)でも検出されている(図21・22、表5)。屈曲部の形状や規模は3遺跡ともにほぼ同一で、張り出しが集落の外側であることも共通する。また、溝跡本体の形状・規模、遺物の出土状況も近似している。赤平(3)遺跡では、付属施設(ピット・性格不明遺構)が検出された。また、重複する全ての遺構(現代の溝跡を除く)のいずれよりも新しい。遺跡間は、林ノ脇遺跡-赤平(3)遺跡は約40km・赤平(3)遺跡-沢里山遺跡は約34km・林ノ脇遺跡-沢里山遺跡は約68kmである。



いわゆる「環壕集落」は、陸奥湾沿岸や小川原湖周辺、馬淵川・新井田川流域などといった地域ごとに検討されることが多かったが、それらを結び、認識や設計を共通するネットワークが存在していた可能性が想定される。「環壕集落」は、野辺地町(二十平(2)遺跡・向田(35)遺跡等)やむつ市(将木館遺跡・向野(2)遺跡等)といった陸奥湾岸でも確認されている。八戸市や中泊町では等間隔で展開する例があることから(齋藤2007)、横浜町でも、今後更に発見される可能性がある。

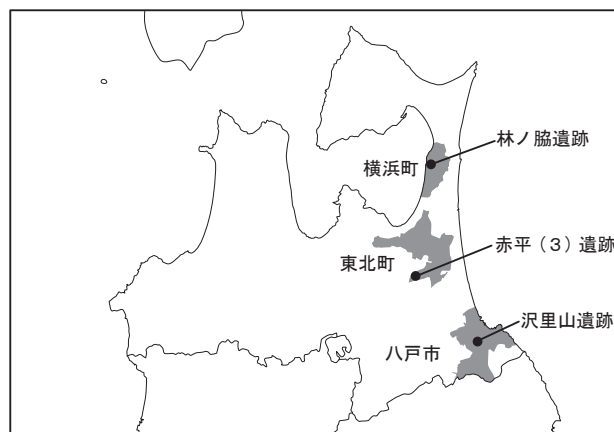


図21 屈曲を有する溝跡・壕跡を検出した遺跡

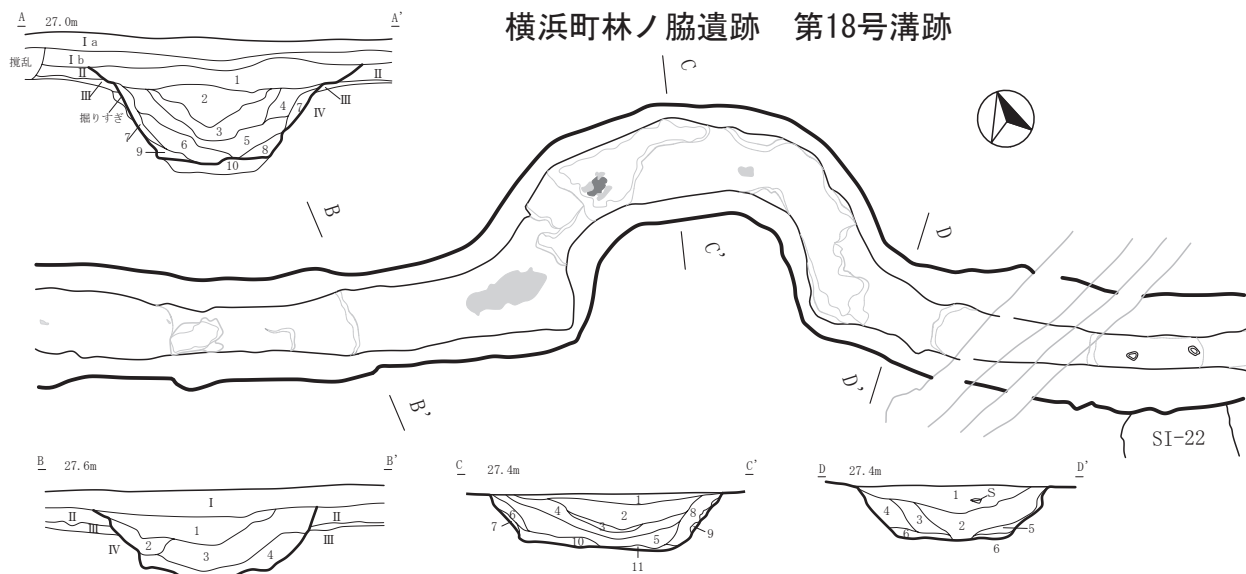
表5 屈曲を有する溝跡・壕跡一覧

遺跡名 遺構名	規模(m)			屈曲部規模(m)				底面	断面形	堆積状況	遺物出土状況	付属施設
	長さ	幅	深さ	外		中						
				長さ	奥行	長さ	奥行					
林ノ脇遺跡 第18号溝跡	47	4.0	1.1	12	6	6	3	ほぼ平坦（屈曲部を境に 双方に緩やかに傾斜）	逆台形状	壁面・底面付近：自然堆積 それ以外の層：人為堆積	主に堆積土中 屈曲部西側の堆積 土中で焼土を確認	なし
赤平（3）遺跡 第2号壕跡	67	3.7	2	8.5	5.5	6	4	ほぼ平坦	逆台形状	中～下層：崩落を伴う比較的短期間 での人為堆積 上層：一定期間をかけた自然堆積 （明治まで埋まり切らなかった可能性）	底面・底面直上の ものは屈曲部を中 心に出土 屈曲部からは炭化 物なども出土	ビット 性格不明 遺構
沢里山遺跡 溝跡	26	3.1	0.8	12	7	7.5	4.5		箱形～逆台 形状	溝中央～南西側：ローム粒・ロームブ ロックが認められるものが多い 北東部：底面に砂の堆積	堆積土中 張り出し部の北東 側付近に投棄され た状態で出土	なし

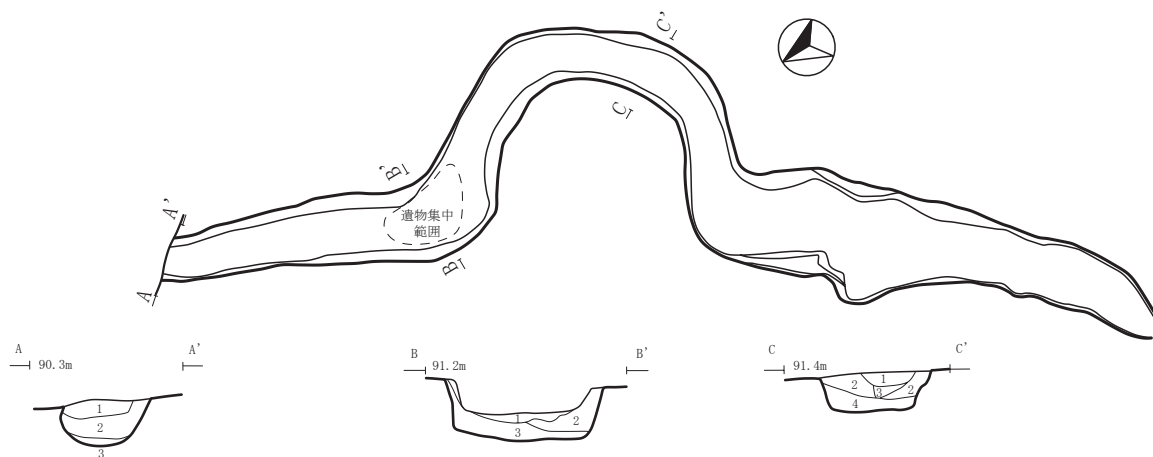
第6節 中世および近世の林ノ脇遺跡

今回の調査では、中世の遺構は検出されず、遺物も遺構外から珠洲産摺鉢1点の出土であった。過去の調査でも中世の遺構は検出されておらず、青磁碗もしくは皿の口縁部(青森県教育委員会2021a)と珠洲産摺鉢(青森県教育委員会2019)が各1点の出土である。前者は平安時代の竪穴建物跡の堆積土中から、後者も遺跡北端部の自然流路中からであり、中世の遺構に伴うものではない。中世の痕跡は遺跡内では希薄である。しかしながら、放射性炭素年代測定で想定される第18号溝跡の埋戻し時期等から、中世の土地利用痕跡が検出面の深さまで至らなかった可能性がある。また、当遺跡は横浜館とは800m程の距離であり、関連する可能性がある。

近世の遺構は検出されなかったが、遺構外から陶磁器が出土した。その中で赤絵の碗と灯火受付皿が注目される。赤絵は高級品とされる。また、土器の灯火受付皿は江戸でも郊外では出土しないとされる(長佐古1993)。近世の「横濱村」は陸運や海運の要所で、遺跡は現在の六ヶ所村泊まで続く道路沿いでもある。村の郊外ではあるものの、遺跡内もしくは周辺に、一般とは異なる性格の建物・施設が存在した可能性がある。(平山)



八戸市沢里山遺跡 溝跡



(八戸市教育委員会1996を再トレース)

東北町赤平(3)遺跡 第2号壕跡

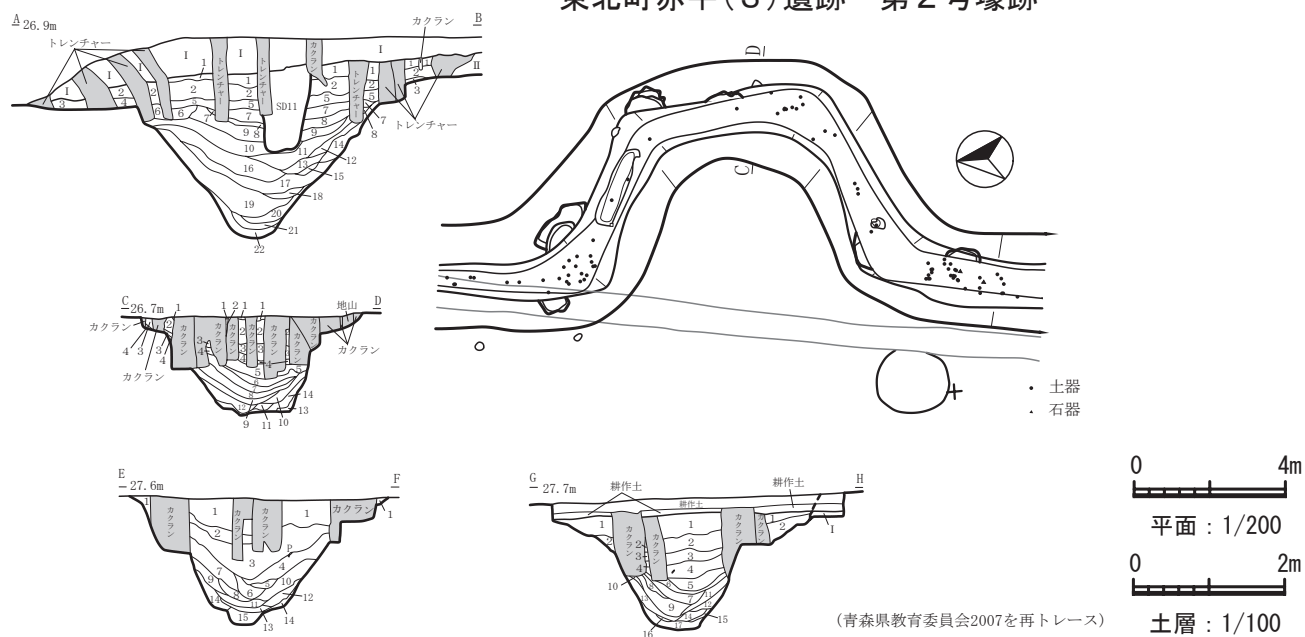


図22 屈曲を有する溝跡・壕跡集成図